

日本の地元学が海を越える

－ブラジル地元学の序章－

鹿児島大学生涯学習教育研究センター 小栗有子

同センターリサーチアドバイザー／地元学ネットワーク主宰 吉本哲郎

1. はじめに

2009年の夏、本稿の共同執筆者の吉本が提唱する地元学をブラジルに紹介するために、9月7日から23日の約2週間をかけて、広大な領土を有するブラジルを縦断した。ブラジル南部に位置するパラナ州に始まり、次第に北上しながらバイーア州を経由し、アマゾン川の河口部にあたるパラ州までたどり着き、最後は、ブラジルの首都であるブラジリアで、ユネスコ・ブラジルオフィスとブラジル JICA が共同開催したセミナーに出席する日程をこなした。

そもそも今回ブラジルに赴くことになったのは、その前年度に JICA の研修生としてブラジルから日本に派遣された、リカルド・ミナーズ（現ブラジル環境省のコンサルタント）、および、ロドリゴ・シュミツ（現パラマ州政府コミュニティ連携特別局の職員）の二人が、我々を招聘したからである。正確には、吉本が招聘を受け、そのアシスタントとして小栗が同行することになったのである。現地では、草郷孝好（現関西大学教授／開発経済学）も途中で合流し、最後のセミナーには、日本から3人が登壇することになった。

リカルドは、日本に滞在中、研修地として熊本県水俣市を訪問し、吉本から直接地元学の指導を受けている。一方、ロドリゴは、水俣市に赴くことも、また、吉本と会うこともなかったが、シャプラニール主催のコミュニティ開発研修で日本に1ヶ月滞在する中、長畑氏がコーディネーターを務めた地元学研修を受けたという。昨今 JICA では、研修生の帰国後のサポートを目的としたフォローアップ事業の予算を組んでおり、リカルドとロドリゴの双方によって別々に提案された「ブラジルにおける地元学の導入と展開」が、JICA ブラジル事務所の判断で一つの企画として JICA 本部（当事業）に申請がなされた。そして、その企画書が今回採択されたことで、我々の渡航が実現することになった。

それにしても、なぜ、日本の地元学が海を越えてブラジルに飛び火するのか。これは、ブラジルに赴いた我々にとって興味深い話である。また、今回の渡航に小栗が同行できた

ことは大変ありがたい話であったが、ここにももう一つ興味深い話がある。それは、行程の最後の2日間に予定されていたブラジリアのセミナーの主題が、「ブラジルと日本の国連持続可能な開発のための教育（ESD）の10年へ貢献」であったことだ（ゆえに、ESDの専門家として小栗は招聘されることになった）。いや、むしろ、セミナーの前に予定されていた数多いコミュニティ訪問のすべては、このセミナーに収斂されることが意図されていた。「ブラジル」、「日本」、「地元学」、「ESD」、「コミュニティ」というキーワードが、なぜ結びつくのか。その回答への糸口は、我々を招聘したリカルドやロドリゴの問題意識に負うところが多い。以下、旅程を追いながらその理由を明らかにしてみたい。

2. ブラジルの渡航概要

(1) 渡航目的と方法

我々が今回赴いた「ブラジル地元学プロジェクト」は、ブラジル JICA を事務局に、彼らの理解と協力のもとで実施されたものの、二週間の現地滞在の行程を含めて、リカルドとロドリゴが分担して企画にあたった。ブラジルに到着して、最初に訪れたクリチバ市の二日間（9日～10日）は、クリチバ市を州都とするパラマ州政府の職員であるロドリゴが責任をもち、クリチバ市以降の日程（11日～22日）は、リカルドがすべてをセッティングした。我々は、渡航前に何のためにブラジルに赴き、何が期待されているのかといった趣旨の確認をメールで多少やり取りをしたものの、企画者側の意図が飲み込めたのは、現地に到着した後のことであった。共同企画者といっても、リカルドとロドリゴでは、それぞれの立場や環境が異なることに加え、日本で体験した地元学の違いも影響してか、地元学への期待に多少の差異が感じられた。

まず、パラナ州政府コミュニティ連携特別局に勤務するロドリゴの関心は、コミュニティとは何であり、またなぜ重要なのかについて、ロドリゴが管轄するクリチバ市内の

関係者とそのコンセプトを共有することにあった。一方、リカルドは、環境省のコンサルタントという比較的自由的な立場から、コミュニティの実態とかけ離れた政府の政策を改め、コミュニティと政策をつないでいくことに問題関心があった。経済成長という思考でしかブラジルの開発を考えていない政策立案者に対して、コミュニティ開発という思考からブラジルの開発を考える必要性を訴えたいという思いが彼にはあった。また、コミュニティ自体についても、これまでの共同体意識から急速に個人主義が目立つようになり、コミュニティ内部に目を向けるよりも、外ばかりを見る傾向が強まっていると指摘する。

ブラジルでは、奴隷制が廃止されたのはポルトガルから独立した1882年のことで、すでに100年以上が経っている。ところが、奴隷制の廃止以後も、土地改革（農地解放）がなされておらず、支配構造を温存したまま国づくりを進めてきている。また、ブラジルは広大な国土を持つがゆえに、未だにいわゆる文明社会と接点を持たない森の民などが存在するという。ブラジルの歴史と地政学的理由によって、多様な発展段階のコミュニティが無数に存在しているのがブラジルである。リカルドが、今回我々に見せたかったものは、正にその多様なコミュニティの姿であったと語った。

ロドリゴと異なりリカルドは、吉本から直接地元学の指導を受けている。単なる手法としての地元学ではなく、開発の哲学としての地元学の意味を理解していることが、彼の話から伝わってくる。リカルドは、今やBRIC'sという名で、急速な経済成長を続けるブラジル社会が、華やかな発展を遂げる一方で、深刻さを増しつつある矛盾が、コミュニティを直撃していることを肌で感じているようであった。ゆえに、コミュニティ開発の考え方に影響を与えることができる地元学に大きな期待を寄せていた。

まずは、コミュニティの人にも、政策決定者にも地元学が何かを伝えたい。そして、何がコミュニティを豊かにし、また、そのための政策とはどうあるべきかを共有していきたい。環境にも意識の高いリカルドは、生きるとは、土地とつながっていることであり、開発もそうなされるべきだという。彼のこのような情熱に導かれ、我々は、行く先々で全く違うブラジルと出会うことになった。

リカルドらが用意したコミュニティの訪問は、我々にとっても大きな挑戦であった。「地元学にマニュアルはない。現場に合わせて手法を開発する。」と吉本は強調する。ただし、準備をしないわけではない。我々も渡航前に、全

く予測のできないブラジルを想定して、一応の打ち合わせはしていた。しかし、実際に現地へ赴いてみると、毎日、場所も人もころころ変わる。滞在時間でさえ、1時間未満もあれば、長くて半日と、日本でおこなう地元学実践とは勝手が全く違う。しかも、言葉が通じない。コミュニティに入れば、通じるのはポルトガル語のみで、英語も使えない。日系ブラジル人の飯田さんが、旅行の最初から最後まで我々の通訳を務めてくれたが、意思の伝達は容易ではない。それでもコミュニティの訪問回数を重ねるごとに、最初に吉本による水俣の経験と地元学の紹介を行い、続いて事前に検討した「調べる項目」を用いたグループインタビューをおこなうことで、「地元学を紹介する」基本形がなんとなく整っていった。

吉本の水俣の経験談は、訪問したいずれのコミュニティにおいても、深い共感と我々への信頼感を高め、権力に抑圧されながら生きる人々との距離を一気に縮める力をもっていた。一方、リストアップした調査項目は、いい地域の条件である、①地域に仲間が3人以上いる、②生活技術を学ぶ場がある、③住んでいて気持ちいい、④いい自然がある、⑤いい仕事がある、⑥いい習慣（生活文化）がある、⑦いい行政がある（以上、結城登美雄）を少しアレンジした内容に加え、一番大切にしていることや、これまで食べて一番おいしかったことなど、吉本地元学では定番となっている質問を投げかけてみた。もちろん最初は、日本からやってきてなぜわざわざそんな質問を、という怪訝な思いもあっただろう。だが、吉本地元学は、地元の人に何かを教えるのではなく、地元の人を力を引き出すことに極意がある。どこまで地元の方に、地元学の意図が伝わったか分からないが、行った先々で、笑い笑顔にたくさん出会えたことは、我々を多少なりともほっとさせた。

ところで、質問をする我々側としては、地元の方が返してくれる「本音」から、地域の状況を読み解く重要な手がかりを得ることになる。つまり、地元の人言葉から、そのコミュニティの課題も希望も見えてくるのである。そして、我々の今回の最終的なミッションは、政策決定者も集う最後のセミナーにおいて、訪問した先々で見（え）たことにコメントを添えて発表することであった。なんとか一通りの役目を終えることが出来たと思うが、今回のプロジェクトを企画したりカルドとロドリゴの願いは、今回は、始まりの始まりであって、本格的なブラジル地元学の展開を今後新たな資金調達の下で継続することであった。本稿

の副題が、「ブラジル地元学の序章」としてあるのもそのためである。今後の参考資料という意味も込めて、我々が見聞し、経験したことを以下にまとめておきたい。

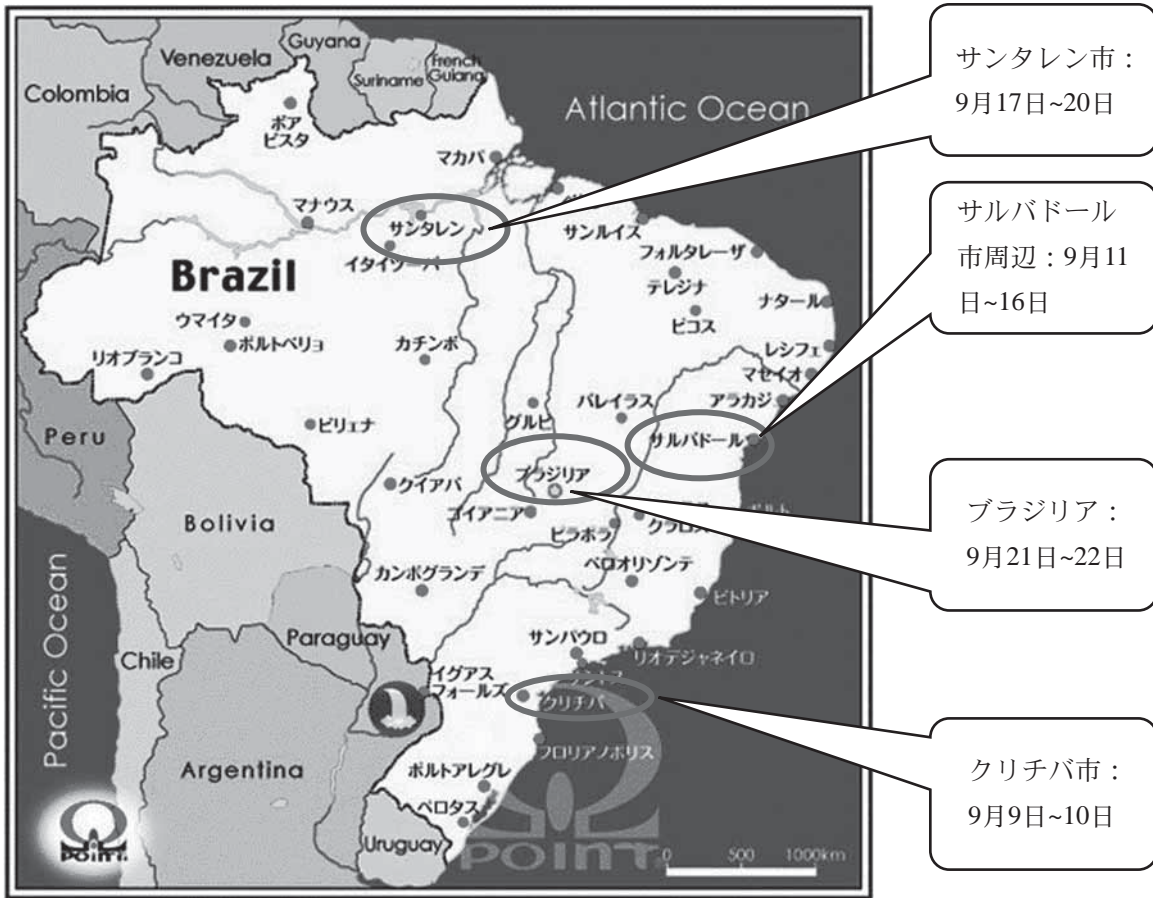
(2) スケジュール

実際に訪問した場所は下記のとおりである。時系列に示しておく。

9月8日 (火) 日本発 (移動日)
9月9日 (水) パラマ州・クリチバ市：5つのコミュニティを視察 (訪問地1) ①ズンビ・ドス・パウマーレス, および, ②マウア (訪問地2) カジュル 昼食 (訪問地3) ポリシアミリタル・ド・パラマ (パラマ州警察本部) (訪問地4) ヴィラ・オステルナッキ (一番殺人率の高かった地域) (訪問地5) タツクワラ (夜間)
9月10日 (木) パラマ州・クリチバ市：セミナーの開催 主催者：S E R C (セクレタリア・エスペシャル・デ・レラソエス・コン・コムニダーレス) / パラマ州政府の特別局で、コミュニティとの仲介役を果たすのがミッション 会 場：セレパラ (セントラル・エレクトロニクス・ド・パラマ) / コンピューターセンターの教室。
9月11日 (金) 移動日 (航路) パラマ州・クリチバ市→ベロオリゾンテ [経由] →バイーア・サルバドール市 (陸路) サルバドール市→バレンテ市 (夜/現地着) コミュニティ・ラジオとAPAEBの関係者にヒアリング/バレンテの町の中心地に繰り出す (講堂/劇, 食事, ダンス)
9月12日 (土) バイーア州・バレンテ市 (訪問地1) ヤギ乳の加工所 (訪問地2) バレンテの中央市場 (訪問地3) APAEBの関連施設：娯楽・スポーツ (会員のための福祉厚生施設) 昼食 (訪問地4) サイザルを用いた絨毯工場 (訪問地5) ババアガイ集落 (APAEB創設者の村)
9月13日 (日) バイーア州・サンタルース市 (訪問地1) コミュニティ・ラジオ/ジョン・ガルシアのインタビュー (訪問地2) ポボワード・ローゼ集落/子ども副市長・ロゼネット (陸路移動) その日のうちにソン・フェニックス市へ (草郷さんと合流)
9月14日 (月) バイーア州・マラゴジッペ市 (ソン・フェニックスの隣の町) (訪問地1) ポンタ・デ・ソーザ集落 (マングローブの村) 昼食 (訪問地2) ボートに乗り込んで、サラミーナ集落 (大農場の跡地)

9月15日 (火) バイーア州・カシュエーラ市 (訪問地1) キロンボ・デ・サンフランシスコ (キロンボ対反キロンボの抗争) 昼食 (訪問地2) アソシアソン・キロンボーラ・デ・サンチアーゴ (奴隷の手によって建てられた教会) (陸路移動) サンチアーゴ市泊
9月16日 (水) バイーア州・サンチアーゴ市 (訪問地1) カオンジェ集落 (女性リーダー) (訪問地2) カレンバ集落 / (サトウキビ農場の遺跡, ソン・ロッケ教会) (陸路移動) サントアマロで昼食をとり, サルバドールの空港へ向かう (航路移動) サルバドール市→ブラジリア (経由) →ベレン (経由) 市→サンタレン市
9月17日 (木) パラ州・サンタレン市 (訪問地1) タパラグランデ集落 / エスコーラ・ムニシパール・デ・エンシーノ・フンダメンタルサンジョルジェ (小学校訪問)
9月18日 (金) パラ州・サンタレン市 (訪問地1) イガラッペ・ド, コスタ / エスコーラ・ムニシパール・デ・エンシーノ・フンダメンタル・サンセバシチオン (1973年に設立, 小中高校生が通う) (航路移動) プライア・デ・アウテール・ド・シオン
9月19日 (土) パラ州・プライア・デ・アウテール・ド・シオン (タパジョース川) (訪問地1) エスコーラ・デ・フローレスタ (森の学校) / コンフェデラルソン・ブラジレイラ・ドス・セリンゲイロス・ド・ブラジル (アントニオさん) (訪問地2) エスコーラ・デ・アントニオ / 先住民の小学校 (航路・陸路移動) フェルナンド宅に泊 / ポンタ・ド・クルルビーチで休息
9月20日 (日) パラ州からディストリット・フェデラル・ブラジリアへ移動 ※ブラジリアは、州ではない。新しい憲法1988年10月1日より知事を住民が選挙で選ぶようになった)
9月21日 (月) ブラジリア：セミナー「行動と政策の間で - コミュニティにおける持続可能な開発のための教育」 主催：ユネスコ・ブラジルオフィス, ブラジルJICA
9月22日 (火) ブラジリア：セミナー「行動と政策の間で - コミュニティにおける持続可能な開発のための教育」 主催：ユネスコ・ブラジルオフィス, ブラジルJICA
9月23日 (水) ブラジル発→日本

(3) 地図



地図の出展：http://www.aquanotes.com/s_america/brazil.html

3. 訪問コミュニティの概要

(1) ブラジル南部

ブラジルに到着後、最初に訪問した町は、パラマ州クリチバ市であった。クリチバ市は、世界第2位の人口一人当たりの緑地面積を誇り、人間環境都市として世界的にも有名な町である。都市計画の下に道路網や優れた公共交通機関システムなどが一体化されている。そして、「暮らしやすい」という評判が、クリチバ市に新たな問題を生みだしていた。その問題とは、近隣の町々から「暮らしやすい」という評判を聞きつけて、多くの人が入り込んできたことであり、その結果、クリチバ市の郊外を中心にスラム街が形成されるとともに、日夜麻薬や殺人などの犯罪が横行するようになっていた。我々が今回訪問した5つのコミュニティのすべてが、このようなクリチバ市の郊外に広がる無職や低所得者層の暮らす地区で、各々の地区に拠点を設けて、改善に取り組む活動団体を訪れた。

訪れたコミュニティは、①ズンビ・ドス・パウマーレス、②マウア、③カジュル、④ヴィラ・オステルナッキ、⑤タツクワラの5箇所であり、クリチバ市の東西の郊外にある貧困地域であった。訪問した場所の共通点は、地元のリーダーを中心に、彼らを支えるように、行政や企業、公益団体など多様なステークホルダーがパートナーとなり、貧困地域に暮らす人々の自立的な生活を支える様々なプログラムを展開していたことであった。

まず、どこのコミュニティにおいても、住民が集える場所（建物）があった。最初に訪問したズンビ地区では、通称「黄色い家」が、住民たちが自由に集える拠点であったし、3番目に訪問したカジュル地区では、「住民」立の幼稚園が、住民の自立を支える拠点を演じていた。拠点を中心に展開されるプログラムや活動に関わる人々は様々であった。たとえば、ズンビ地区では、毎週土曜日になると、訪れた者には無料でお茶とお菓子が振舞われ、その前段としての散歩や血圧チェックを組み合わせることで、健康への



写真1 カジュアル幼稚園の子どもたちは、ダンスがうまい。ダンスの披露と交換に食料を得る取り組みは、市役所から3ヵ月ごとに支給される運営費を帰る途中に盗まれた危機に始まる。子どもたちに食べさせる食べ物がない状況を子どもにダンスをさせることで12トンの食料を集めることができたという。

意識を高めていくことが意図されていた。ほかにも、古着を集めてそれを加工、商品にしたり、野菜の栽培方法を教えたりと、住民が少しでも自分たちの力で生活向上を図っていけるような支援がなされていた。多くのコミュニティでは、職業訓練のプログラムが提供されていた。パン屋、美容室、パソコンなど、講師は皆ボランティアで、行政も関わるが、行政任せにしない。できることをできる人がやるというパートナーシップが、うまくとられていたことが印象的であった。

パートナーたちの動機には、放っておくと若いときから麻薬に手を出し、殺人事件に巻き込まれるという厳しい日常に対して、自分に何かできることはないのか、という奉仕精神が支えているようであった。カジュアルで幼稚園を運営する代表のマリアさん(34歳)は、8児の母で、「過去に19歳の生徒がギャングに撃たれて死んだ。若い人が亡くなるのは社会の損失で、二度と起こさないことを信じて仕事をしている。」と語っていた(写真1)。クリチバ市では、警察署も「社会安全」という概念の下、一般に認識される警察の仕事をはるかに超えた活動を行っていた。我々が説明を受けた「社会安全」には、次の8つの柱で構成されていた。「公共の安全」、「所得の向上」、「教育」、「市民権」、「宗教」、「健康」、「食の安全」、「都市開発」である。そして、4番目に訪問したヴィラ・オステルナッキ地区は、クリチバ市の中でももっとも治安の悪いコミュニティであり、警察はあえてそこをモデルに社会安全プロジェクトを進めていた(写真2)。



写真2 カリンさん(左)は、10年間毎週火曜日に150の家族に食事を提供していた。「社会安全」プロジェクトが始まって料理の質が高まり、とても助かっていると語る。パナマ州警察のマーガレットさん(右)は、6年前からこのプロジェクトの構想を仲間と考えていたという。

(2) ブラジル中央部

クリチバ市を後にして、次に向かったのは、ブラジルの中央部に位置するパイア州の5つの街のコミュニティであった。降り立ったサルバドール市から車で移動すること3時間、最初に到着したのは、バレンテ市であった。この町の訪問目的は、APAEBBAを視察することであった。APAEBBAは、サイザレリア地域における持続可能性と共同



写真3 APAEBBAを創設した農民の村は美しかった。村人にほっとする場所はどこかと尋ねたところ、「舗装された道路から村に通じる土の道に入ったところ」という答えが何人も住民から戻ってきた。



写真4 商業用として栽培されているサイザルはこの地域の特産品。肉厚の葉からは繊維をとり、長く伸びた茎は硬く、丈夫な棒として垣根などに使用される。



写真6 村を歩いた後は、学校で昼食をいただく。近隣から子どもや大人が集まり、歌と音楽と踊りが始まった。虐げられている自分たちへの誇りや女性たちを称える歌の大合唱で熱気に包まれた。

開発に関する協会の略称で、地元資本（共同出資）で、農業学校、文化施設、コミュニティ・ラジオ、牛乳工場、じゅうたん工場などを複合経営する大規模な組合組織である。APAEBの歴史は、ブラジルの軍事独裁政権時代だった70年代までさかのぼり、パパガイオ村の一人の農民とそれをささえた3人の牧師によって創設された（写真3）。抑圧されていた農民に対して、イタリアから来た牧師が、その説教の中で常に「目を開きなさい。自分たちでやりなさい。」と語りかけていたという。牧師による説教は、軍事政権も認めていた「学習の機会」となり、共同組合の立ち上げに大きな影響を与えたという。

現地では、その土地で栽培される植物のサイザルを利用したじゅうたん工場と、ヤギのミルクをチーズやお菓子に加工する工場などを訪問した（写真4）。土地にあるもの



写真5 サボテンが繁茂する乾燥した土地（カチンガ）では、岩のくぼみに溜まる雨水が、政府の援助により水道が引かれるまでは、貴重な生活水であった。共同作業で岩の水周りを掃除していた習慣も今はもうない。

から付加価値のある商品をつくり、販路を自分たちで開拓して販売する。それらを農民らが共同出資でおこなうのが基本である。この活動への政府や地元行政からの支援はほぼゼロに近い。たとえば、APAEBが経営する工場の反対側にある外来資本のじゅうたん工場には、土地や税をめぐる優遇が政府により認められているが、そのような恩恵をAPAEBは一切受けていない。国の政策は、外国や大規模な資本には優しいが、その土地に暮らす住民にはまなざしが向けられていないのだという。

APAEBが出資するコミュニティFMの代表者に話を伺ったところ、コミュニティFMが立ち上がる前は、報道機関といえば、それは、大きな会社や政治の実力者が保有するラジオ局しかなく、コミュニティの人々の望みを聞いてくれることはなかったという。報道を通じて、コミュニティの声が伝わる機会がないため、自分たちで出資してコミュニティ・ラジオを立ち上げることを決めたという。ただし、コミュニティ・ラジオを開設できない（規制する）報道関係の法に阻まれ、局の立ち上げは極めて困難で、警察当局が妨害にやってくる有様だった。闘争の末、コミュニティFMは今では、近隣市町村をあわせて15局まで拡大し、パーソナリティの養成に力を入れている。ただし、未だ権力統制に抵抗しながら地域のニュースを流す努力を続けなければならないのだという。

APAEBを後にして次に向かったのは、サンタルーソ市のポボワード・ローゼ集落であった。この集落は、元々住んでいた土地を大地主に締め出されたことによって生活の

場を失った人々が暮らすコミュニティであった。ブラジルは、農地改革がなされていない上に、土地が広大すぎて、所有権がはっきりしない。その結果、現在もなお、その土地に暮らしていた村人に何の相談もなく、権力あるものが力尽くで、塀で土地を囲い込むことが日常のこととしておこなわれるのだという。土地を奪われた村人らは、新たな住まいを求めて移動する。今回訪問した集落は、政府の援助を勝ち取ることで、新規に切り拓いた土地に定住することができた場所であった。乾燥地帯（カチンガ）に群生する多種多様なサボテンや岩場から生活に必要な物資を調達する暮らしを営む一方で、村にある学校では、村人の生活を豊かにするために、栽培植物や果樹が植えられてあり、農業指導を学校で受けられるようになっていった（写真5、6）。村の女性リーダーは、貧しくとも我々の文化が継承できる場所（学校）ができたことが何よりも嬉しいと語る一方で、権力と金をもち、再生力の弱いカチンガの木を乱伐する大農家の協力を得て、共存していく難しさに将来の不安を口にする。孫やひ孫たちにどのような世界を渡すことができるのか。私たちのできることはやっていくので、日本とも協力できることはしていきましょう、という見識高い凛とした姿に驚きを覚えた。

サルバドル市に到着してからここまで我々をエスコートしてくれたのは、バイア州フェイラ・デ・サンタナ大学のフェラーロであった。環境工学を専門にし、リカルドの友人でもある。英語が堪能で、村の状況などをいろいろ聞き出せたのは彼のおかげであった。フェラーロとは、ブラジリアのセミナーで再会することを約束して、我々はイグワップ湾の河口部に近いソン・フェニックス市に向かった。そこで我々を出迎えてくれたのは、バイア州政府の環境系団体の Inga (Institute for management of Water and Climate) のスタッフと、その夜から合流した大阪大学(当時)の草郷孝好氏だった。ブラジル中央部滞在の後半は、Inga の案内により、これまでとはまた違う風土や歴史を背景に暮らしを営む5つの集落を訪問した。

最初に訪れたのは、マラゴジッペ市のポンタ・デ・ソーザ集落で、マングローブ林が広がる一帯に位置する漁村であった（写真7）。漁民組合運動が生まれた場所であり、今なお自分たちの生きる権利を行使するために努力が重ねられていた。法律の勉強を通じて、漁民にも年金制度が適用されるように闘争したり、村から仲買業者を排除して漁民の所得をあげたりと健闘する一方で、漁村の中の連帯を



写真7

高めることに苦心していた。また、プロジェクトといえば、いつも行政から押しつけられては難しい問題を引きこすため、また新しいプロジェクトが始まると聞いて恐怖を覚えたとある女性は語った。実は、今回の我々の訪問自体がプロジェクトなんだという説明を聞いて、初めて安心したよ



写真8 父と一緒に領主に仕えた少女時代を送ったナンシー。昔も今も変わっていない。希望がないという。それでも、毎日ボートで往復数時間をかけて子どもや孫たちを学校に送り届ける。立派な子に育って欲しいと願う。

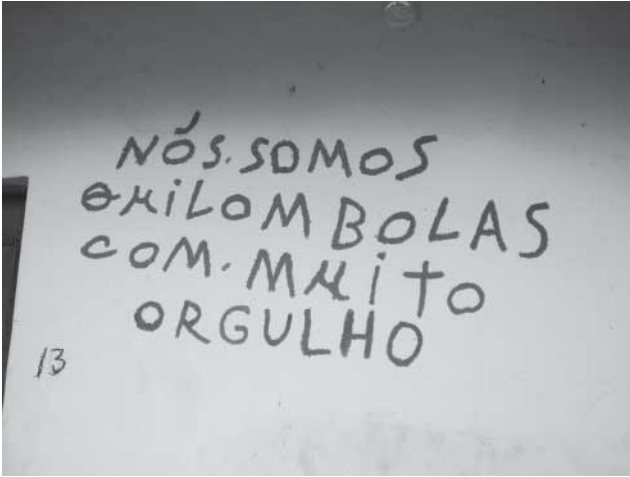


写真9 サンフランシスコ集落の若きリーダーであるラビコの家の壁面には、「我々は誇りを高くもったキロンボラである」と書かれてあった。



写真10 キロンボであることの証を鼓舞するように、演技が途絶えることなく、演者が入れ替わり立ち代りカポエラが続く。キロンボとしての誇りと文化が継承されていく様を垣間見た。

うだった。

漁民の夫人たちにグループインタビューを行うと、その足でボートに乗り込み、移動すること1時間、オランダ支配下時代の要塞跡を住まいにするキロンボが暮らすサラミーナ集落に到着した。キロンボとは、自らを奴隷の子孫と自覚し、誇りをもって暮らす人々のことを指すようである。もとは、奴隷時代に支配者から逃れ、山の奥深くに隠れて暮らし、独自の文化を継承発展してきた人々のことを指す。奴隷制度が廃止された後は、しばらくして元領主の土地に戻って暮らすようになった人も多いようだ。今回訪問したサラミーナ集落は、そのようなキロンボ集落の一つで、奴隷時代に仕えていた領主の屋敷のすぐ近くで暮らす人々であった。集落の中で電気が通っているのは一軒のみで、生活は貧しいと語る(写真8)。これまで食べたもので一番おいしかったものはなにかと尋ねたら、「何でもお

いしい。大きなヘビも食べたが、ジーア(カエル)がおいしい。」と教えてくれた。一方、周囲にある植物の使い方について尋ねたら、ひと晩かけても語りつくせないと返ってきた。歴史上は、確かに奴隷制度の廃止は100年前のことである。しかし実態は、生きていくために、結局元領主に仕えて暮らしつづける奴隷が多かったのだという。

キロンボ集落には、その後も4つのコミュニティを訪問した。最も滞在時間が長かったサンフランシスコ集落は、目下土地の使用権をめぐり地主と抗争中であり、地主による懐柔政策も影響して、同じ仲間内にキロンボ対非キロンボの対立がみられる複雑な地域であった。しかし、その分集落内の団結は強く、キロンボとしての誇りとアイデンティティは強固であった(写真9)。若いリーダーが、長老たちに見守られながら村を統率していた姿が印象深く、ピリンバオ(弦楽器)の軽快な音とドラムのリズムに始まり、手拍子と掛け声に乗って我々に披露してくれたカポエラは、幼年の子どもから青年まで実に迫力のある演技であった(写真10)。人々の暮らしは、半漁半農の生活で、村から畑に通じる道は、村人の往来で忙しかった(写真11)。

サンフランシスコ集落のすぐ近くのサンチアーゴ集落



写真11 畑には、ブラジル料理には欠かせないマンジョッカ(キャッサバ)がたくさん栽培されていた。毒性をもつため、水に浸してからつぶし、粉にしたものを炒る工程が必要で、村にはそのための工場もあった。



写真12 部屋の中央にある祭壇には、オグン（水/水色）、オシューズ（山/緑）、イヤンサン（火/赤）、オシュラ（飲料水/白）といった自然の神を表現したものになっており、踊りにもそれぞれの意味と役割があるという。



写真13

は、401年前に奴隷の手によって建てられた教会「イグレージャ・サンチアゴ・ド・イグワッペ」のある街中にあった。夕方遅くに到着した我々を出迎えてくれたのは、若者たちで構成するヒップホップダンスであった。直前まで誇り高いキロンボのカポエラを見てきただけに、その落差は大きく感じられた。ところが、集落の代表者の話によれば、ヒップホップもまた、集落の若者の誇りを回復するためのものであることを語ってくれた。全国で活躍するヒップホップダンサーと比べて決して見劣りしない、あるいは、それ以上の力を持っていることを示したい。若者も踊っている間は、悪いことをしないという。一方、グループの活動費として、州や市などの公的援助は一切なく、運営が困難という問題に直面していた。

ブラジル中央部にある、最終日に訪れたキロンボ集落は、カオンジェ集落とカレンバ集落であった。前者は、女性が村の代表を務め、二代目の若手リーダーの鋭い目がとても印象的だった。伝統文化を重んじ、村を周遊する観光ツアーにも力を入れ始めているようだった。我々を迎えたのは、美しい衣装に身を包んだ子どもたちの優雅な踊りだった（写真12）。我々の訪問にあわせて、大学の研究者も数名参加しており、公的機関による資金援助がこの集落にはなされている様子が、小奇麗な雰囲気から伝わってきた。

最後に訪れたのは、カレンバ集落で、奴隷時代のサトウキビ大農場の遺跡が残る村であった（写真13）。村人に聞くと、「サトウキビはあまり作りたくない。思い出したくない。」と語り、緑豊かな森とマングローブ林に囲まれて、スルールという貝の採集や養殖のカキなどで小遣い稼ぎをしているという。この集落にも400年前に立てられたソン・ロケ教会が海を臨むように建てられていた。キロンボ集落には、アフリカの独自文化が継承されていると指摘されている。何が独自の文化なのか、その判断ができる識見を我々は持ちあせていない。その一方で、我々が一つ感じたことは、アフリカの神を包み込むかたちでキリスト教が深く人々の精神に宿っていたことである。

(3) ブラジル北部

来た道を戻り、再びサルバドール空港に向かう。何キロもひたすら続くサトウキビ畑の広大な面積に圧倒されながらその所有者を聞いてみた。回答は、一人の地主のものだという。スケールの違いに何度も愕然とさせられる。その経験は、ブラジル北部に到着してからも変わらなかった。ブラジル北部に向かうには、サルバドール空港から一端ブ



写真14



写真15 アマゾン川沿いにある建物のすべてが、洪水を想定して、柱で床を2～3メートル高く持ちあげている。民家と民家間の移動はボートで、子どもたちもボートを器用に操り登校している。

ラジリア空港を南下し、再び北上すること5時間、アマゾン川の河口に近いサンタレン市に着いた頃には、すっかり日付が変わっていた。翌朝は、ハンモックを市街で調達し、港に向かった。我々を待ち受けていたのは、サンタレン市が所有する木造の立派なカシクワリ号であった(写真14)。乗船すると、サンタレン市のルシネージ教育長官、「森の学校」のクラリス校長、EPAM基金のエディやフェルナンドといった方々に迎えられた。これから始まる3日間の船上の旅のエスコートをしていただく面々であった。

船が出港してからすぐ眼下に広がった光景は、真っ青色をした支流のタバジョース川と茶色く漂うアマゾン川の合流線で、目視でもくっきりと境目がわかった。川幅は200キロもあるという。これから目指すコミュニティは、いずれもアマゾン川の川べりに立地し、雨季になると水かさが増えるため、牛やヤギなどの家畜は、雨季に入る前に150キロ～200キロ内陸のアマゾンの高原地帯に移動させるという話を聞いた。川べりにある学校は、乾季の6ヶ月しか開校されず、雨季の間は閉鎖される。我々が訪問した9月は、学期の真っ盛りで、ルシネージ教育長官も訪問するというので、立ち寄った二つの学校では、それぞれ熱烈な歓迎を受けることになった。

最初に訪問した学校は、タバラグランデ集落にあるエスコラ・ムニシパル・デ・エンシーノ・フンダメンタルサンジョルジェだった(写真15)。子どもたちの踊りや歌に始まり、朗読や演劇、教師や従業員らの歌も披露されて、芸術色豊かな歓待を受けた。ルシネージ教育長官によ



写真16 言葉が通じなくともストーリーが伝わる名演技で、観客の笑いを誘っていた。アマゾンの熱帯雨林に扮する生徒は、葉っぱを身にまとい、木が伐採されると何人もの生徒が床中央に積み上げられ、無残な姿を伝えていた。

ると、連邦政府が定める年間800時間分の教える内容以外に、サンタレン市では、芸術、スポーツ、娯楽、環境の4つの分野に力を入れているという。長官は元教師で、山間部の学校で教えた経験が長い。彼女自身、幼い頃は行きかえり10キロの道を歩いて学校に通い、山の中でいろんなことを教えられた経験をもっている。大学では教育哲学を学びパウロ・フレイレの影響を強く受ける。最近『幸せ』という小説も書き上げたそうで、子どもたちに夢を見る力をつけさせることが一番大事だと語っていた。根っからの教育者だった。

次に訪れた学校は、イガラッペ・ド・コスタ集落のエスコラ・ムニシパル・デ・エンシーノ・フンダメンタル・サンセバシチオンであった。ここでも子どもたちの歌に始まり、この地域一帯の環境と開発(産業)の歴史が、子どもたちの演じる劇として紹介された(写真16)。日本人が持ち込んだジュッタの栽培が金になると聞きつけて、山を切り倒して栽培はしたものの、毎年の洪水で失敗に終わってしまった。次の耳寄りな情報は、マヤデーラという魚を捕る網の導入で、一度にたくさんの魚が取れるのでそれで金持ちになりましょうという内容だった。実際導入してみたものの、小魚まで捕ってしまうマヤデーラのために、今度は魚の量が減ってしまう。最後は、「私たちの国はどうなってしまったのか」という歌を全児童が合唱した。保護者も多く駆けつけて劇を見入っていたのがとても印象的だった。

訪問したいずれの学校でも、全校生徒と我々の交流がひと段落すると、次に教師と子どもたちの二つのグループに



写真17 「森の学校」の入り口。学校の面積は33ヘクタールにのぼり、年間サンタレン市の5000人の児童生徒を受け入れている。アマゾン川とジャングルの両立について、感じたり考えたりする場を市の教育予算で提供している。

分けて、グループインタビューをおこなった。グループインタビューは、訪問した先々でもおこなったが、ここには確かに子どもたちが目を輝かせながら夢を語っていた。将来の夢は、先生、看護師、弁護士、歌手、医者、飛行士、船乗り、生物学者などだ。一方、教師の多くは、サンタレンの市街から通う者が多く、アマゾン川流域の暮らし（家畜や畑、漁業のことなど）を知らない教師も少なくない。その失われつつある、環境と深い関わりをもつ生活文化の伝承を、教育の中に取り込もうとする「森の学校」にも訪問する機会を得た（写真17）。

2008年に設立された「森の学校」は、ブラジルのゴムの木評議委員会がサンタレン市に所有する広大な土地に立地する。市と評議会が協力協定を結んでスタートした学校には、サンタレン市の学校に通うすべての児童生徒が、年に3～4回通う場所である。広大な敷地の中には、この土地の伝統的な生産活動が体験できる施設とスタッフがそろっている。ゴムの栽培・採取に、マンジョッカの加工、多様な植物の栽培に、漁業体験までできる施設になっている。学校の事務所には、アマゾンの森を守ろうとして暗殺されたフランシスコ・シコメンディスが残した言葉と写真が掲げられていた（写真18）。

「森の学校」を訪問した帰りには、先住民たちが通う先住民の学校にも立ち寄った。

先住民の多様な幾何学模様によって形とられた校舎の壁や、一人ひとりの子どものルーツを示す系図が教室に貼られていたのが興味深かった。一方、「先住民の学校に通える子ども



写真18



写真19

もは、文化の伝承ができるからまだいい。問題は先住民学校に通わない子どもたちへの文化伝承なんだ。」と森の学校のスタッフは教えてくれた。

カシクワリ号が停泊する川べりにもどると、すぐ前の木の上に、野生のナマケモノが休息していた（写真19）。最後に思いがけない動物との遭遇であった。そして、変化に富んだコミュニティ訪問もこうやって終わりが訪れた。

4. ブラジリアのセミナーとブラジル地元学

サンタレン市からブラジリアまで、約10時間をかけて戻ってきた我々は、最後の山場であるブラジリア・セミナーに出席した。会場は、inter legis（ブラジル議会が管理し、全土の行政通信技術の近代化を図る目的の施設）で、延べ80名の参加者が集った。二日間にわかって開催されたセミナーのプログラムは下記のとおりである。

タイトル「行動と政策の間で：コミュニティにおける持続可能な開発のための教育」

初日のプログラム

開会式 それぞれに機関の代表者より挨拶：ユネスコ・ブラジル，ブラジル・JICA，先住民協会会長，ブラジル政府社会連帯，ブラジル環境省，ブラジル教育省
セッション1 「環境危機とグローバリゼーションの時代におけるコミュニティの合理性と美」持続可能な開発におけるコミュニティの反省と大切さの認識 登壇者：伝統的組織とコミュニティの国内委員会代表，ブラジル大学教授，草郷（日本）
セッション2 「社会運動からコミュニティに関する公共政策への提言～個人史より」 登壇者：ブラジル大学教員，吉本（日本）など
セッション3 「コミュニティと向き合うブラジルの公共政策～パート1」 登壇者：教育相，労働省，文化省など
セッション4 「コミュニティと向き合う水に関する公共政策～パート2」 登壇者：環境省，INGAなど
セッション5 「革新的な経験：日本の地元学とブラジルにおける人と伝統的コミュニティに関する新しい社会地図」 登壇者：ブラジル大学教員，吉本（日本）など

二日目のプログラム

サブタイトル「事例研究：行動と政策の間で」

セッション5 「学校におけるコミュニティの質向上の取り組み，文化を重視したクリチバ・プロジェクト」 登壇者：教育省，文化省
セッション6 「農業，自立経済，情報」 登壇者：コミュニティ政策担当者
セッション7 「漁業管理と合意，保護地域における管理と地元の利用，先住民の土地管理と気候変動プロジェクト」 登壇者：環境保護団体（MPA，WWF，COPING）
セッション8 「ブラジルと日本のシナリオを分析する：ESDへの道」 登壇者：サンパウロ大学教員，小栗（日本）
閉会式 代表者挨拶：ブラジル・JICA，ユネスコ・ブラジル，日本大使館

次に、本稿のはじめに提起した、「ブラジル」、「日本」、「地元学」、「ESD」、「コミュニティ」というキーワードが、なぜ結びつくのか、に関して、以下のとおり、ブラジリア・セミナーにおける吉本のプレゼン内容を抜粋することで、その一つの応答としたい。

(1) 見えてきたこと

- ・多様なブラジルがあった。多様な気候風土があり、そこに生きる固有で多様な生活があった。
- ・女性が頑張っているところほど活気がある。
- ・若いリーダーたちが育っていた
- ・子どもたちの笑顔がいい。目がいい、輝いている。子どもは希望だった。
- ・教育が行き届いていた。
- ・行政、住民、専門家、そしてパートナーの連携が大事
- ・大地主と貧困層の人たちの土地争いがある。人には生存権があるはず。
- ・仕事につく技術(電気工、パンづくりなど)を教える場があった。
- ・地区の自治が大事である。
- ・貧困層への支援プログラムの展開は犯罪を未然に防ぎ、健康にして医療への支出を減らすことにつながっていた。
- ・地元の人たちの意思を尊重していた
- ・住民が自信と誇りを回復することがやる気をおこしていた

- ・しかし外からの圧倒的に大きな力に翻弄されていた。一つはグローバリズムである。農民たちの生産組合であるAPAEBがつくっているサイザルのじゅうたんづくりはブラジル通貨の切り上げで大打撃を受けた。またダムによる漁獲の減少、新たな造船所づくりによる漁獲高の減少などの不安。
- ・キロンボでは、地主とキロンボの土地争いだったはずなのに、地主派のキロンボもいて、キロンボ同士の争いになっている。本当の敵は見えないものだ。
- ・またマスメディアは地主派のキロンボの主張のみを報道していた。政治的な中立性をなくしている。
- ・コミュニティ・ラジオがあった。そこは勇気をもって意見を言う場となっていた。当然ながら、発言には責任が伴う。自治の訓練の役割を果たしていた。

- ・コミュニティ・ラジオも政治的な中立が求められる。それはマスメディアに対する求めにもなる。
- ・コミュニティには、アフリカ由来の音楽などの伝統音楽が、コミュニティを一つにすることにつながっていた。

- ・貧困層のコミュニティには経済の問題が大きい。何をつくるのが大きな課題。
- ・食べ物は全ておいしかった。アマゾンのサンタレン市は森の学校をつくり、環境教育の場を提供していた。アマゾンがアマゾンであるための大事な活動になっていた。(木の使い方などの伝統と知恵)

(2) 地元学から見ると

- ①結局、哲学が大事である。そして地域ごとに固有の思想と美学を持つことだ。
 - ・地域固有の風土と生活文化の厚みが地域をつくり、ものをつくり、生活をつくる。
 - ・異質の出会いが創ることを誘発する
 - ・伝統の形には意味がある。その意味を把握しないで伝統の形を変えると壊れる。
 - ②自然と生産と暮らしをつないで、新しいものを作る力を持つこと
 - ・新しいものをつくっていないところは衰退する。新しいものとは、あるものとあるものの新しい組み合わせである。
 - ・だから、「ないものねだりをやめてあるもの探し」が必要になる。
 - ・あるものとは、あるものに加えて、人、行事などのコトも含む。
- 水俣は環境都市にするため、日本であるいは世界でも始めての新しいものをつくってきた。
- ③もやい直し(悪化した人の関係をやり直す:荒んだ人の気持ちのままでは水俣再生はおぼつかない)距離を近づけ、話し合い、対立のエネルギーをコミュニティ開発という創造のエネルギーに転換すること。そのためにはお互いの違いを認め合うこと。
 - ④未来に希望をつくり、過去を振り返り、今に行動すること

(3) 地元学は何に役立つのか

①結局は自治である。コミュニティの開発という、自分たちの社会を自分たちで開発発展させていくこと、そのために地元学は有効である。

・でも、コミュニティの自治のために必要なことがある
ア) みんなで生きていく共同社会のルールをつくること (伝統的な助け合いのほか、魚の加工場の使い方など新しい出来事に対応したルールづくり)

イ) 自治を支える事務局機能の充実 (電話、コンピューター、プリンターなど)

コミュニティセンターまたは学校を活用した住民自治の場そして行政参加による支援・協働

ウ) 足元を知ること

②さらに自治を育てていくために原則がある

・困った問題を創造的に解決していくこと。最初はお金をかけずに手間ひまかけてやること。それが出来る人を育てていくこと。

・調べた人しかくわしくならないので、自分たちで足元を調べて、自分たちの役に立てて行くこと。役立っているのは地域づくり、ものづくり、生活づくり

・自分と地域の個性を確認すること。そうしないと変わりすぎて地域を壊したり、変わらずにあえぐことになる。

自治の訓練が必要「地域社会を見る力、発言する勇気、責任を持つこと。仲間をつくってつながって取り組むことの訓練」

③具体的にやりたいこと

・人育て コミュニティで自分たちのことを自分たちでやっていく力を身につける地元学の訓練

・現場での実践的な展開

・日本での地元学の経験の紹介

・アマゾンのサンタレンなどでは、すでに、地元学ぶ先駆的な事例があった。

その経験に学ぶこと

・ブラジルの先駆的な実践者であるパウロ・フレイレが築いた当事者主体の社会づくりの実践に学び発展させていくこと

(4) 最後に

アマゾンで唄を聞いた

TERRA MEU CORPO
AGUA MEU SANGUE
AR MEU SORPO
FOGO MEU ESPIRITO
EA EA EA EA EA O
MAE EU TE SINTO SOB
MEUS PES
MAE EU ESCUTO O CORACAO
BATER
EA EA EA EA EA O

アマゾンのスピリッツである

ブラジルとブラジル人がもっと元気になるため

コミュニティに生きる人たちが、自分たちで、元気なコミュニティづくりからはじめたいものだ



5 . 終わりに

今回我々は、非常に贅沢な旅を経験することになった。「贅沢だ」というのは、2週間という限られた期間であったにもかかわらず、実に多様なブラジルのコミュニティを訪問し、かつ、コミュニティの中で生きる方々と濃密な時間を過ごすことができたからである。これは、ひとえにリカルドとロドリゴ、そして、JICA ブラジルの献身的な受け入れ態勢があっただけで実現できたことである。もっと言うと、クリチバ市で訪問したコミュニティとロドリゴの関係がそうであったように、リカルドのエスコートで訪問した各々の訪問地では、コミュニティと我々を結ぶ、現

地コーディネーター（世話係）をつとめていただいた人・団体が、訪問したコミュニティと非常に強い信頼関係で結ばれていたことが非常に大きかったと確信する。

パラマ州クリチバ市では州政府職員のロドリゴが、バイーア州・バレンテ市とサンタルース市では、フェイラ・デ・サンタナ大学のフェラーロが、APAEBBAと大学ぐるみの協力関係を長年続けていたし、ポボワード・ローゼ集落にも足を伸ばし関わっていた。バイーア州・マラゴジッペ市、カシュエーラ市、サンチアーゴ市では、環境保護団体のingaが、常時3名体制（アンナ、シルヴァニ、タチアナ）で我々を複数の集落に案内してくれた。驚くのは、たとえば、キロンボ・デ・サンフランシスコでは、大地主と緊迫した対立関係にある最中に、得体の知れない異邦人を何の警戒もなく受け入れてくれたことであった。このこと自体、ingaと集落の人たちとの厚い信頼関係が築かれていることの傍証であり、逆にそれがなければ今回の訪問は決してありえなかつただろうと思う。パラ州・サンタレン市では、元教師で、サンタレン市の現教育長のルシネージの全面的なバックアップがなければ、立派な船をチャーターした旅（費用はサンタレン市が負担）も実現しなかつたであろう。そして、現地コーディネーターを選定し、交渉に当たったのはリカルドであり、彼のネットワークの広さと厚い友人関係にも感服させられる。

リカルドがいうように、確かにネットワークは、広いブラジルとはいえ、着実に形成されつつある。そして、このネットワークをさらに強固なものとして、政策決定へも影響を与えられるようにしていくことが、リカルドが描く今後の展望である。今回の旅で強烈に感じたことは、ブラジルの広さと多様さであり、この国が秘める、底知れぬ力の恐ろしさと可能性であった。生存権が脅かされる日常をたくましく生きる人々にみなぎる活力は、日本の教育界で昨今語られている「生きる力」とは、比較にならないほどスケールが大きく深い。虐げられた中にも希望があるからだろうか。あるいは、多様さがもたらすエネルギーなのだろうか。いずれにしろ、日本を改めて客観的にみる機会を今回の旅は提供してくれた。思えば、ブラジルは、ブラジル移民の時代から日本との関係は深く、そういう意味では、遠くて近い国である。地元学をきっかけに両国が生きる「今」をもっと深く知り、描きたい未来に向けて歩みを一歩ずつ進めていきたいと切に願う。

最後に、この旅の実現に尽力いただいた、坂口さん、市川パウロさんをはじめとするブラジル JICA 事務所、リカルド、ロドリゴ、通訳の飯田さん、現地コーディネーター、そして、出会ったすべてのコミュニティの人々に心から感謝を申し上げたい。